

非標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差

三井 はるみ¹

(国立国語研究所)

1. はじめに

本稿は、2012年7月から11月にかけて、当時の共同研究者5名（三井、鎌水、久野、亀田、田中）が共同で行った、非標準形の使用と意識に関する首都圏大学生アンケート調査の結果の一部を報告するものである。調査の概要と結果の地図は、プロジェクト Web サイト内「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」(http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/1_summary.html)で公開している。また本稿は、Urban Language Seminar 11th (2013年8月17-18日、広島市文化交流会館)における口頭発表、三井はるみ・鎌水兼貴・久野マリ子・亀田裕見・田中ゆかり「非標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差」(“A Study of the Geographical Distribution of Lexical Variation among Younger Generation Speakers in the Tokyo Metropolitan Area”)を元に、三井が原稿化したものである。

なお、同調査のうち、本稿で扱わない、言語意識の地域差に関する調査結果については、本報告書第2部の鎌水論文を参照していただきたい。

2. 「首都圏」の位置と範囲

初めに、対象地域である「首都圏」の位置および、「首都圏」で話されていることばの性格について確認する²。

「首都圏」は、日本の首都東京を中心とする都市圏である。「首都圏」の範囲について、行政用語等としては様々な定義があるが、「言語圏としての首都圏」に関しては、田中ゆかり(2010:6)の提案がある。これは、首都圏を「通勤・通学圏に代表される日常的な言語接触が生じうる範囲」と捉える考え方で、具体的な範囲は、東京駅から約70キロ圏、ほぼ、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の1都3県と重なる地域とされている。鉄道網に大きく依存した日常的な人の移動範囲は、現代の東京都市圏形成の大きな要因であり、後述のとおり、言語分布の面からも、一定の妥当性があるものとして支持される。そこで本稿ではこの提案を採用し、その上で、周辺部との影響関係も視野に入れるために、1都3県とその周辺部を加えた地域を扱うこととした。

次に、「日常的な言語接触が生じうる範囲」について、社会調査データで見ておく。

図1は、国勢調査のデータに基づく、東京都区部(23区)への通勤・通学人口の地図である。各地点に二つ並んだ●のうち、右側の●(原図では赤)が、直近の国勢調査である、2010年の数

¹ mitharu@ninjal.ac.jp

² この点に関しては、第1部収録の鎌水論文「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して」が、より包括的な論点整理を行っている。

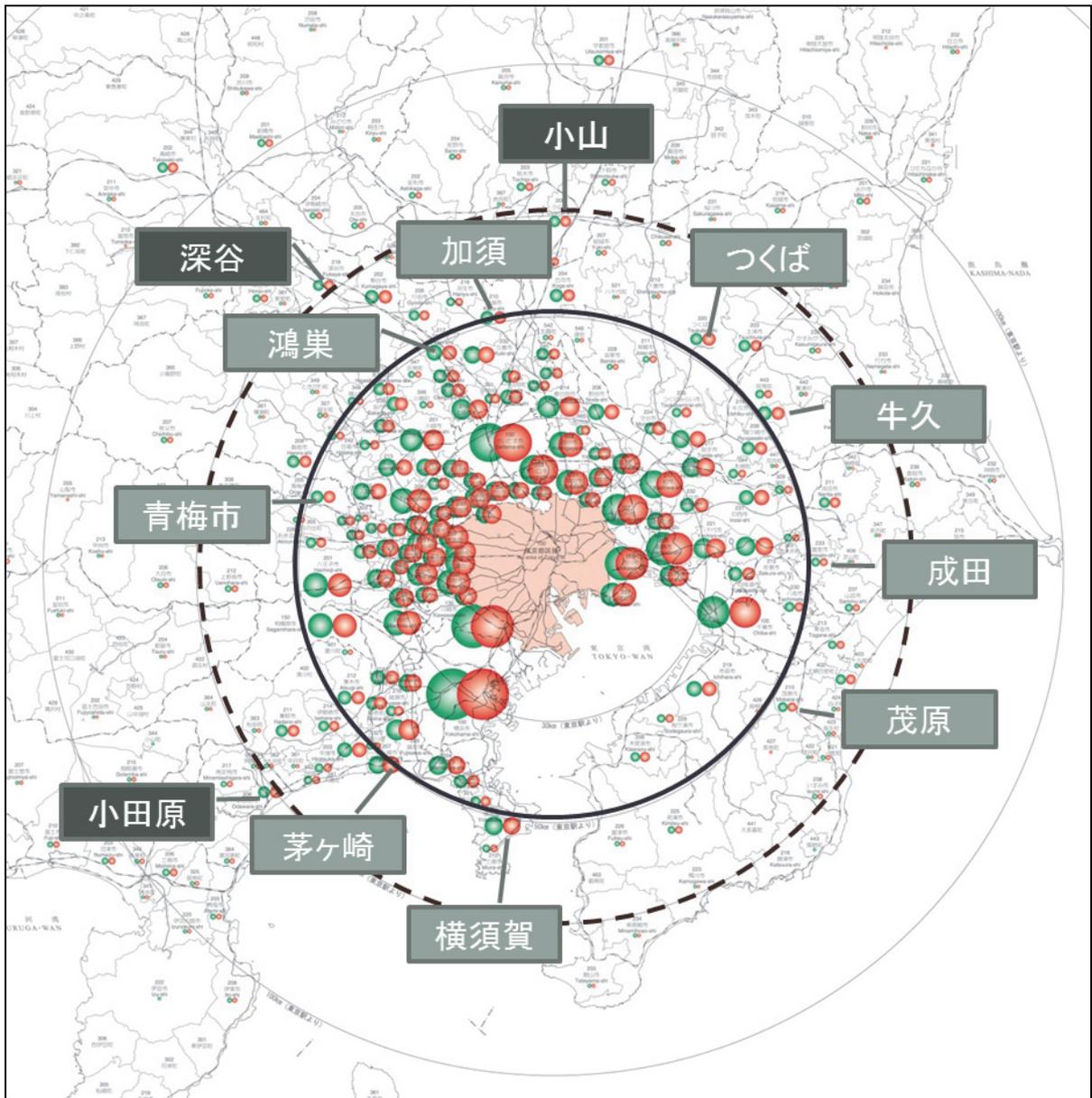


図1 東京都区部への通勤・通学人口（平成12年＝各地点左●・22年＝右●）
 （総務省統計局日本統計地図より、
http://www.stat.go.jp/data/chiri/map/c_koku/dtukin22/index.htm）

値を示している。通勤・通学人口の多い、つまり●の大きさの大きい地域は、実線で囲んだ範囲の内側にほぼ収まる。この実線の円は、東京駅から50キロ圏を示す。図中に、50キロ圏のライン上にある市の名称をいくつか表示した。50キロ圏のだいたいのイメージがつかめよう。一方、50キロ圏より外側にも、やや通勤・通学人口の多い地点が見られる。小田原、深谷、小山といった、東海道本線、高崎線、東北本線等の主要鉄道路線沿いの市がそれで、これらはおおむね、点線で示した70キロのライン上に位置している。鉄道アクセスのよい場所であれば、70キロ圏くらいまで、東京への通勤・通学圏となっていることがわかる。

図1は実数によるものだが、これを、自治体ごとの人口に対する割合で示すと、図2のように

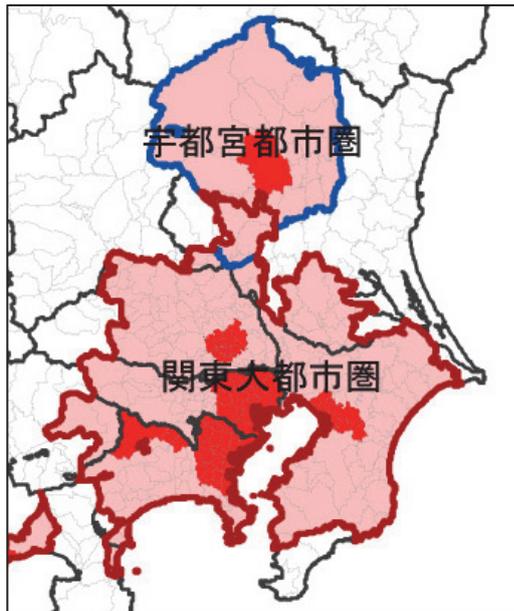


図2 1.5%通勤・通学圏（平成22年）
 （総務省統計局「平成22年国勢調査大都市圏・都市圏全国図」より、
http://www.stat.go.jp/data/chiri/map/c_koku/daitoshi/index.htm）

なる。図中の「関東大都市圏」（薄い色（原図ではピンク色）で塗りつぶされ、太線（原図では濃い赤色）で囲まれているエリア）が、1.5%通勤通学圏、すなわち、東京23区、横浜、川崎への通勤・通学者が、15歳以上の人口の1.5%以上を占める市町村である。やはり、東京駅から約70キロ圏、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の1都3県にほぼ重なる。²

以上のような社会的データは、「東京駅から約70キロ圏」、「東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の1都3県」を、概括的に「日常的な言語接触範囲」として扱うことのできる可能性を示唆していよう。³

3. 「首都圏」で話されていることばの性格

東京首都圏は言うまでもなく、全国政治・経済・文化の中心地である。その活動に関与して、人口は多く流動性が高く、物と情報の流通が盛んで、この地域で発生した新たな事象は、しばしばほどなく全国に波及する。言語も例外ではない。

このような首都圏の言語を捉えるにあたっては、いくつかの層、あるいは、面を想定することが妥当、との考え方が、これまで、東京、および首都圏のことばを研究対象とする複数の研究者によって主張されてきた。加藤（1970）、野村（1970）、田中（1983）、飛田（1992）らである。

加藤（1970）は、総武線・常磐線沿いの「東京の東側」の郊外地帯（千葉県）に住む人を次のように分類した。

- (イ) 昔から住んでいる土着の人
- (ロ) 東京から“移住”した人
- (ハ) 東京のつもりでたまたま郊外に住んでいる人

移住者のうち、(ロ)は、「大震災、戦災、戦後の混乱、また最近では過密から逃れて」移住した人で、土地に対する愛着を持っているが、(ハ)は、「東京に実家があるが、新家庭を持ってここに住

² 実数と比率の違いは、自治体の規模の違いを反映する。50～70キロ間地帯では、実数はさほど多くなくても、50キロ圏内より人口の少ない自治体が多いので、比率はある程度高くなる。このため50～70キロ間地帯からの通勤・通学者については、地元と東京中央部とで、捉え方が異なる可能性がある。地元では「ここから東京に通う人も意外にいる」という意識であるのに対して、東京中央部からは「そこ（そんなに遠く）からも通うのか」と捉えられている、というように。これは50キロ圏内と50～70キロ間地帯で、都心部への通勤・通学者の社会的位置づけが異なることにもつながるが、このような首都圏内部の構造的な多様性と、言語との関係を探ることは、今後の課題と考えている。

³ ここでは、首都圏の範囲付けに際して、人の日常的な移動に伴って言語接触が生じる、という点を重視したが、他の観点からの検討も可能であろう。例えば、地域社会の都市的な性質を見る一つの指標として、住民の出身地構成、さらにはその一つに現れとしての、自治体の首長、市区町村議員の出身地別構成なども有効であると考えている。

んだとか、全国各地から東京へ流入したが、たまたまここに住むことになった」人で、住所は千葉であっても、そこは東京であると意識しており、土地のことに関心がない、という違いがあるとし、後者が「現在どんどん増えている」とした。

野村（1970）は、「都市としての東京の性格や、東京人の言語意識を併せて考え」、現代東京語の構造を、次のような三層の構造として捉えた。

- (1) 家族や親しい友人などとの日常の会話。（東京弁を含むそれぞれの母語である方言が、かなり自由にあらわれる）
- (2) 社会的な活動を行なう時の、ややあらたまりの気持を持つことば。（相手との間に一定の距離が置かれる。敬語の問題は大部分ここに含まれる）
- (3) 特定の個人を対象としない、公共的なことば。（放送のことばや演説のことば）

非ネイティブを「現代東京語」の話し手に含め、パーソナルコミュニケーションとマスコミュニケーション、日常と改まりといった、言語の社会的運用面に広く目が向けられている。

野村（1970）でも踏まえられている、田中（1983:35）は、「東京語は三つの顔を持っている」として、

- (1) 東京人の日常語（各地の方言に当たるもの）
- (2) 全国各地の人々が寄り集まる植民地・東京、大都会・東京の性格を反映した、植民地語ないしは都会語
- (3) いわゆる標準語をめざして、日本の公用語として、かなり意識的に手を加えられ続けてきた側面

の三つの面を挙げている。ネイティブの日常語（(1)）をベースに、「都会語」「公用語」といった、東京および東京語の社会的位置を反映した側面を指摘している。

飛田（1992:10）は、近代語研究の立場から、東京の言葉の性格として、

- (1) 都会性
- (2) 文学性
- (3) 標準性

を挙げた。そしてそこから、「東京」と「東京人」の範囲を導き、「東京」は、時代を下るにしたがって拡大している「江戸文化を受けつぎ発展させてきた都市部」、「東京人」は、都市部「東京」に住み、移住者を含めて東京人意識を持つ者、とした。

これらの捉え方を踏まえ、本稿では、地域の言語として見た場合、首都圏の言語は少なくとも、三つの層を含んでいると考える。

- (1) その土地に生まれ育った人の日常のことば
- (2) 全国・世界から人の集まる都市のことば
- (3) 標準語の基盤となる基準性のあることば

(1)は、他の地域の方言と同様の側面、(2)は、都市言語“Urban Language”としての側面、(3)は、主として他地域の人々や、放送・教育など公共性のある言語表現を求める立場から要請され

る側面である。⁴

この全体像の把握はなかなか難しく、これまでの首都圏地域の言語研究は、それぞれの比重で、この三つの層の解明を目指してきたと行うことができよう。

今回の報告は、(1)の「その土地に生まれ育った人の日常のことば」という面を切り口とし、(2)(3)の側面との関わりを探ることを目的としている。

4. 首都圏若年層のことばの地域差を探ること

首都圏若年層のことばは、一般的には、新現象を先取りし変化を主導する、というポジションにあると考えられる。逆に、「その土地に生まれ育った人の日常のことば」、すなわち方言という面はあまり注目されることがない。この地域のことばは、もともと共通語との違いが小さいことに加え、共通語化が早く徹底的に進んだ。意識の上でも東京のことばを志向する傾向が強い。その結果現在の若年層のことばには、目立った俚言も地域差もなく、全域同じようなことばであって、むしろ個人差や場面差が大きい、と意識されている。

しかし、ことばの地域差が生まれる原理的背景を考えると、いかに人や情報の移動や流通が盛んであるとは言っても、一人一人の個人の日常的な移動・接触の範囲は限定的なのであり、特に、主として話し言葉で用いられる非標準形が人的接触により伝播する状況は残されていると考えられる。実際、高度経済成長期後の1980年代には、井上史雄（1985 他）によって、東京新方言の存在が指摘されている。

そこで、「首都圏言語」プロジェクト共同研究者グループでは、あらためて、現在の首都圏若年層の言語に地域差はあるか、あるとしたらどのような様相で存在しているか、ということ明らかにしたいと考えた。

しかし、それをどのように調査するか、という問題がある。地域差を明確に捉えるためには、個人差等の誤差ではないと判断できる程度に高い密度での分布調査が必要である。また、どのような項目に地域差があるか、あまり予想のつかない段階で調査を始めるので、いろいろな項目をまず調べてみて、違いのありそうな項目が見つかったら、さらに地点を増やして共同で調査を行う、というような、探索的な進め方が望まれる。調査と集計・地図作成の労力、また、回答者のモチベーションなど、様々な面での阻害要因が次々と浮かぶ。

そこで私たちのプロジェクトでは、このような調査を実現するために、携帯電話を用いた言語調査システム、“Real-time Mobile Survey System”（略称：RMS）を開発した。開発者は共同研究者の鎌水兼貴氏である。

RMSは、調査協力者にメールで回答を送信してもらい、それをサーバ上で処理して、数分後に分布地図として出力する、というシステムである（調査用紙で回収し、その回答を入力・表示することもできる）。大学の教室で学生に回答してもらうことを前提として開発されており、調査場所が Web 閲覧できる教室であれば、メールで送信した回答を、数分後に、分布地図として、

⁴ (3)は、野村（1970）の(3)、田中（1983）の(3)、飛田（1992）の(3)と近いが、実態そのものを指すだけでなく、ゆれや変化、文体差、多様性を含む自然言語でありながら、「標準語」の具現に最も近いという「基準」としての眼差しを受ける、というありようにも注目している。

回答者自身が見ることができる。本稿で提示する分布地図は、RMSシステムで出力したものである。

RMSシステムについて詳しくは、解説論文である、鎌水兼貴（2013）「首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践」（『国立国語研究所論集』6）（本報告書第3部に再録）を参照していただきたい。

5. 調査の概要

2011年度から10ヶ月間程度、RMSシステムを用いた試行調査を行い、その結果を踏まえて、統一調査票による調査を行った。調査票は次ページに挙げる。

調査の概要は以下のとおりである。

目的 首都圏若年層の言語的地域差の把握

内容 非標準的な言語事象の使用と意識に関するアンケート調査

回答者 首都圏8大学に在学する大学生約700名

うち、首都圏1都3県出身者 約500名

実施年月 2012年7月・11月

調査項目 調査票を次ページに示す。

- ・言語事項 38項目（うち7項目で使用意識を質問）

新語・新用法，新旧方言形，若者ことば，アクセント 他

※先行調査のある語形を含む

語形の使用については、「言う」「聞いたことがある」「聞かない」の三者択一回答

- ・メディア接触等に関する言語生活項目

- ・フェイス項目

方法 教室における集合調査。携帯メール，または，アンケート用紙で回収

調査者 三井はるみ，鎌水兼貴，亀田裕見，久野マリ子，田中ゆかり

表示 5～15歳の最長居住地を大字レベルで地図上にプロット

調査内容の検討は、調査当時の共同研究者5名（三井、鎌水、亀田、久野、田中）が共同で行った。調査した8大学は東京都と埼玉県に立地する。そのため、千葉県と神奈川県の実験者が少ない。これを補うため、その後、神奈川県に立地する大学で補充調査を行った（現在整理中）。本稿では、この調査のデータに、前後に行った小調査で得られたデータを加えて検討する。

調査項目には、過去の状況と比較する目的で、井上（1983, 1984, 1985a, 1985b, 1988）、柴田・馬瀬・佐藤（1985）等の先行調査で取り上げられている語形を含めた。

結果はRMSシステムで集計し、回答者が言語形成期に最も長く居住した地点を、ほぼ大字のレベル（「東京都立川市緑町10-2」なら「緑町」，「東京都北区西が丘3-9-14」なら「西が丘」）で地図上にプロットして示した。なお、この後に示す地図表示には、上述のとおり、別の調査で得たデータが含まれているので、総地点数は700を上回る。

ことばのアンケートのお願い

2012年7月

以下のことばに関する意識についておたずねします。欄にチェックを、()欄に記述をしてください。

授業の解説以外に聞いたことがない単語については「聞かない」と回答してください。回答は、個人が特定されない形で集計処理されます。「最長居住地」の回答を元にして地図を作成しますが、誰がどこにいるかといった利用はしません。

チェック例 a a x a x a x a チェックは内に入れて下さい

1. カタス (片付ける)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

2. モス (燃やす)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

3. パナナムシ (ツマグロオオヨコバイ (黄色い小さな虫))

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

4. ダイジ (大丈夫)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

5. アオタン (青あざ)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

6. ヨコハイリ (割り込み)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

7. ズルコミ (割り込み)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

8. [イ]チゴ (イを高く発音する)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

9. コ[コ]ロ (2つ目のコを高く発音する)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

10. アルゲダ (ありそうだ)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

11. アルッテ (歩いて)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

12. アンマ (あまり)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

13. 食堂イクベ (食堂に行こう)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

14. イットキアル? (行ったことある?)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

15. ウザッタイ (不快だ)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

16. 自転車のウラ (自転車の後ろ)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

17. エゲツ (あからさまにひどい) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 18. シヤ (視野) (~もありだ) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 19. シレル (知ることができる) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 20. スルナシ (するな) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 21. センヒキ (定規) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 22. ソースット (そうすると) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 23. ソースント (そうすると) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 24. ソーナン? (そうなの?) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 25. ソレナ (そうだね) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 26. ダベ? (だろ?・でしょ?) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 27. チガカッタ (違った) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 28. チガクテ (違って) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 29. 先生チャウ (先生ではない) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 30. ノセレナイ (乗せることができる) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 31. モヤイ (性格が暗い) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 32. ヤノアサツテ (3日後・4日後) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 33. ユーテ (そうはいつでも) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 34. ワリカシ (わりと) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 35. ワンチャンへアル (もしかして~かもしれない) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
 36. イカナイデシタ (行きませんでした) a おかしくない b ややおかしい c かなりおかしい
 37. 髪キラナイ? (髪切ったんじゃない?) a おかしくない b ややおかしい c かなりおかしい
 38. ノメレナイ (飲めない) a おかしくない b ややおかしい c かなりおかしい

39. 日常でよく利用するメディアを全て選択してください

- a テレビ b ラジオ c 新聞 d マンガ雑誌・単行本 e マンガ以外の雑誌 f マンガ以外の書籍
 g パソコン h 携帯電話 (スマートフォン以外) i スマートフォン j タブレット端末 k. なし

40. ふだんよく使うもの, よく見るもの全てを選択してください

- a YouTube b ニコニコ動画 c 2ちゃんねる d twitter e Facebook f ミクシィ
 g GREE h モバゲー i なし

41. 都心(山手線の周辺・内側)に行くことがありますか(通学は除く。都心在住者は外出先として) a あまり行かない b よく行く c いつも行く

42. 外出時に関西弁を聞くことがありますか(大学内及び、自分・同居家族の関西弁は除く) a あまり聞かない b よく聞く c いつも聞く

43. 自分の話すことばは何だと思いますか。(1つだけ選択。その他にチェックした場合はカッコ内に自由記述)

- a 標準語 b 共通語 c 東京方言 d 関東方言 e その他→()

44. 人と話すときに方言が出ることを気にしたほうがよいと思いますか。

- a 気にせず方言のまま話せばよい b なるべく共通語になおした方がよい c 場合による

45. 方言が使えたらいいと思いますか。 a すでに使える b 使えるようになりたい c 使えるようになりたいとは思わない

46. 問47のa~yの25語のうち、ふだん、いくつの語を使いますか。(bに続いて語数(1~25)を記入)(例:10語使用 → b10)

- a ひとつもない b 1つ以上 → () 語

47. 以下のa~yの25語のうち、よく使う語を、最大5語チェックしてください。

- a アニ(何) b アメンボー(氷柱) c ウツチャル(捨てる) d オコサマ(蚕) e オッペス(押す)
 f カテル(仲間に入れる) g カマギッチョ(カマキリ) h カンマス(かき回す) i キナイ(来ない) j ケナルイ(うらやましい)
 k ケンド(けれど) l コレキリナイ(これしかない) m コワイ(疲れた) n セナ(兄) o ソーダッペ(そうだろう)
 p ソラ・チク(嘘) q タカカンペー(高いだろう) r タツペ(霜柱) s タマゲル(驚く) t テングルマ(肩車)
 u トーナス(南瓜) v ドコイクエ・イクイ(どこに行く?) w ヌクトイ・ヌクイ(暖かい) x ハー来た(もう来た) y ヤマサ(山へ)
 z よく使う語はない

最後にご自身について a~k についておたずねします。該当しない欄は空欄でかまいません。(問 b, c, i はありません)

a. 5~15歳までで一番長く居住した場所 (地図にするため、ある程度の詳細な生育地が必要ですが、住所まで細かい必要はありません)

例) 東京都西多摩郡瑞穂町大字箱根ヶ崎 2335 ←「2335」は不要

埼玉県さいたま市浦和区常盤 4-4 ←「6-4-4」は不要

※留学生の方は、国名と省・道・県・州名を教えてください。

()

d. 5~15歳の間に引越した回数 ()回

e. 現在住んでいる場所(郵便番号でも可。市区町村まで) ()

f. 父親の出身地(市区町村まで) ()

g. 母親の出身地(市区町村まで) ()

h. 配偶者の出身地(市区町村まで) ()

j. 性別 男 女 k. 19 ()年生まれ

6. 結果の概要

回答を調査項目ごとに地図上にプロットし、それぞれの地理的分布を概観すると、地域差の読み取れない項目も多いが、いくつかの項目には明瞭な地域差が見出された。この調査で明らかになった、首都圏若年層の言語の地域差の傾向をまとめると次のとおりである。

- (1) 明瞭な地域差が認められる言語項目がある。
- (2) 過去の調査報告と比較して、分布域に変化がみられる。
 - ① 衰退 ② 普及 ③ 再普及
- (3) 東京 23 区の北東部（下町地域）と南西部（山の手地域）の間に、大きな言語境界が存在する。北東部は埼玉県・千葉県と、南西部は東京都多摩地域・神奈川県と連続性がある。
- (4) 南西部の一部は非標準形の使用を避ける傾向がある。

(1) は、地域差が薄いと見られていた当地域において、若年層の言語的地域差の存在を面的な分布として明らかにした点で、新たな知見である。ただし、明瞭な分布を示さない項目もあるので、それらを含め、今後、統計的手法を用いるなど、他の角度からの分析を検討する必要がある。

(2) は、通時的な視点で、主として 1980 年代に行われた先行調査と比較した結果、多くの語形に分布域の変化が認められたものである。その変化には、「①衰退」「②普及」、それから、いったん衰退しかけたものが再び広がるという「③再普及」のパターンがある。この他に「維持」というパターンがありうるが、先行調査との調査方法の違いにより、「分布に変化がない」ということを積極的に判定するのは難しかった。

(3) は、共時的な視点で、東京 23 区の中の北東部と南西部の間に大きな境界が認められた。北東部は「下町」、南西部は「山の手」、と言われることもあるエリアである。北東部は埼玉県・千葉県と、南西部は東京都多摩地域・神奈川県と連続性があり、全体として、首都圏が二分される。現代若年層の言語使用に関して、東京 23 区内に境界が存在するということは新知見である。

(4) として、まだ見通しの域とも言えるが、東京都内の一部地域には、非標準形の使用を避けるとみられる傾向がうかがわれる。首都圏の中に、非標準形採用への態度が異なるエリアが存在するとすると、「標準語の基盤言語」の実体を解明する上で、重要な手がかりになるものと考えられる。

以下、(1)～(4)のそれぞれについて、例を示しながら説明する。

7. 明瞭な地域差

最初に明瞭な地域差の認められる例を挙げる。

図 3 は、草むらなどに生息している黄色い 1 cm くらいの小さな虫を「バナナムシ」と言うかどうか、の地図である。正式名は「ツマグロオオヨコバイ」。地図を見ると、●で示した「言う」は、東京 23 区西部から多摩地域、および、それと接する埼玉県、神奈川県に存在し、はっきりとした東京中心の分布を示す。既刊の方言集には記載がなく、「現代の東京方言」と言える。

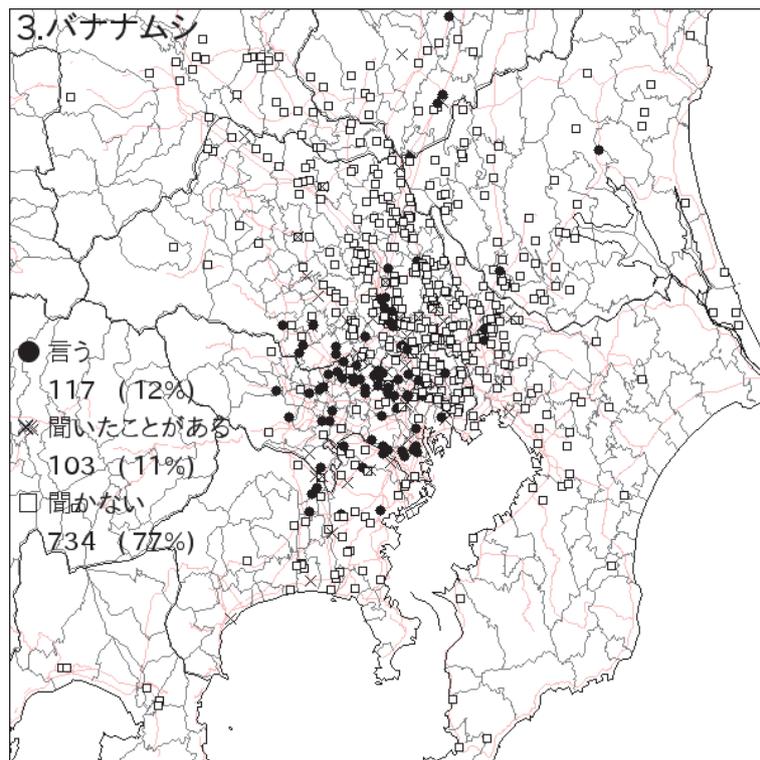


図3 バナナムシ (ツマグロオオヨコバイ)

8. 分布域の変化

次に、過去の調査報告と比較して分布域が変化した例を挙げる。

8. 1 衰退

図4は、「燃やす」という意味の「モス」という言い方の地図である。かつては東京中心部でも、むしろ「モヤス」よりも優勢であった語形だが、現在の若年層では、□の「聞かない」が特に中心部では優勢になっている。全体として、中心部に「聞かない」、周辺部に「聞いたことがある」、そしてさらに外周部に「言う」が多い傾向にあり、この語形の衰退が、首都圏中心部から外周部へ向けて進行していることがわかる。(退縮の周圏分布)

1980年代の調査報告(河崎・井上1983, 井上・荻野1984, 井上1988=図5)では、高年層は、首都圏全域で使用率が高く、若年層でもやや使用率が減少する程度であった。この30年間に衰退が顕著に進んだことがわかる。

8. 2 普及

逆に、分布が広がった例がある。

図6は、並んでいる列などへの「割り込み」という意味の「ヨコハイリ」の地図である。●の「言う」は、神奈川県と東京23区西部・多摩地域、および外周部に広がっている。

1980年代の神奈川県と東京都での調査報告(井上1988=図7)では、高年層はほとんど「ヨコハイリ」を使わないのに対し、若年層では、神奈川県全域で「ヨコハイリ」が優勢になり、東

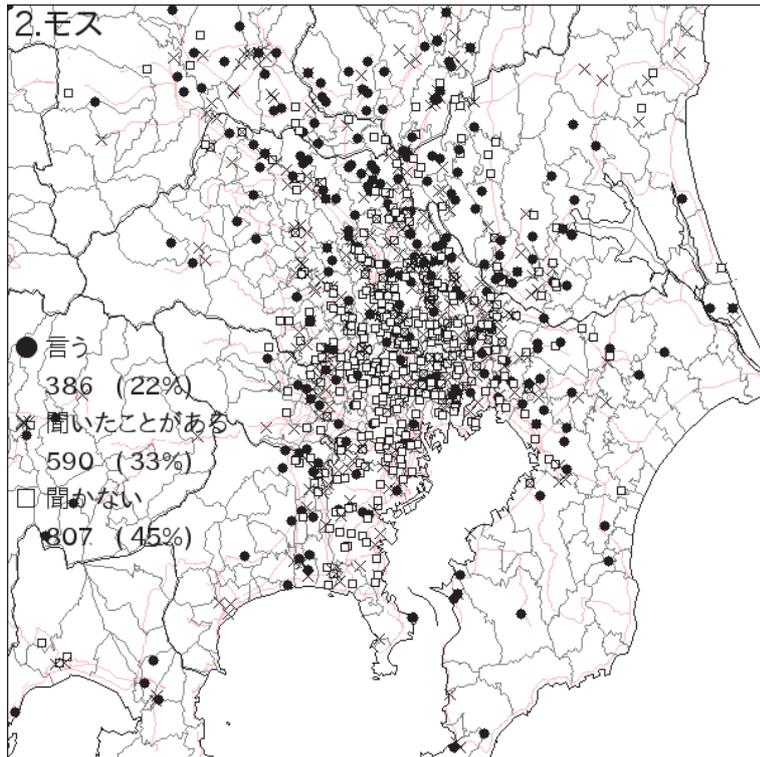


図4 モス (燃やす)

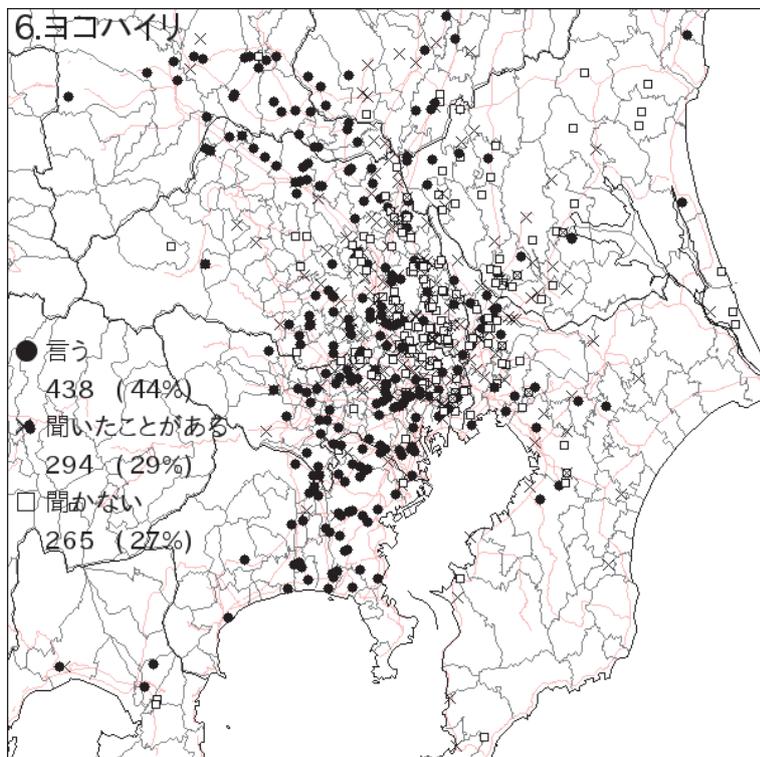


図6 ヨコハイリ (割り込み)

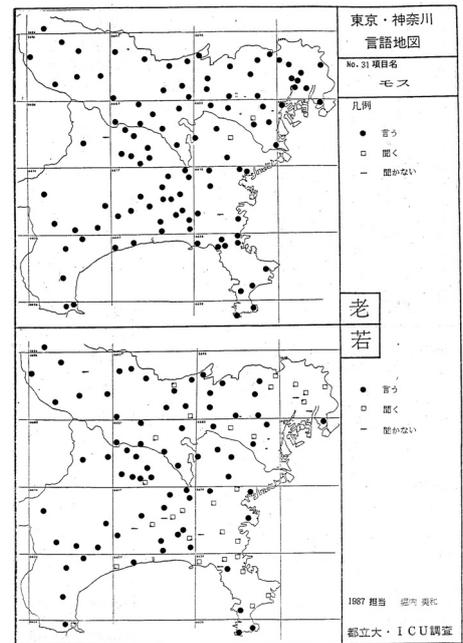


図5 モス 1987 調査
『東京神奈川言語地図』

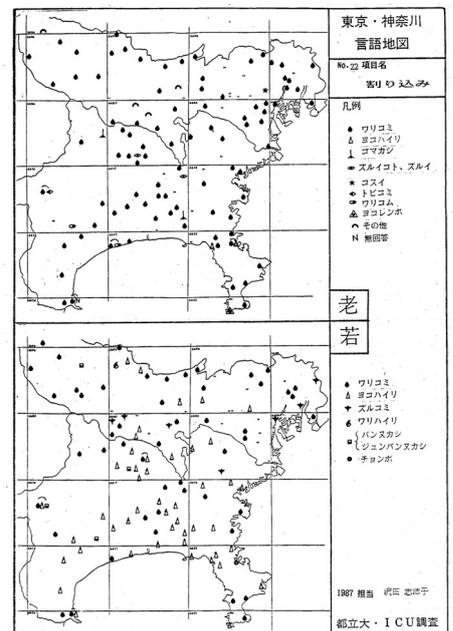


図7 割り込み 1987 調査
『東京神奈川言語地図』

京にも散見されていた⁵。今回は、東京都内の使用地域がさらに広がり、首都圏外周部まで及ぶ。なお、東京都北東部と埼玉県南西部には、「ヨコハイリ」があまり浸透していない地域がある。この地域には、図8に示したように同じ意味の別の非標準形「ズルコミ」が使用されていて、「ヨコハイリ」と「ズルコミ」は、ちょうど相補分布をなしている。

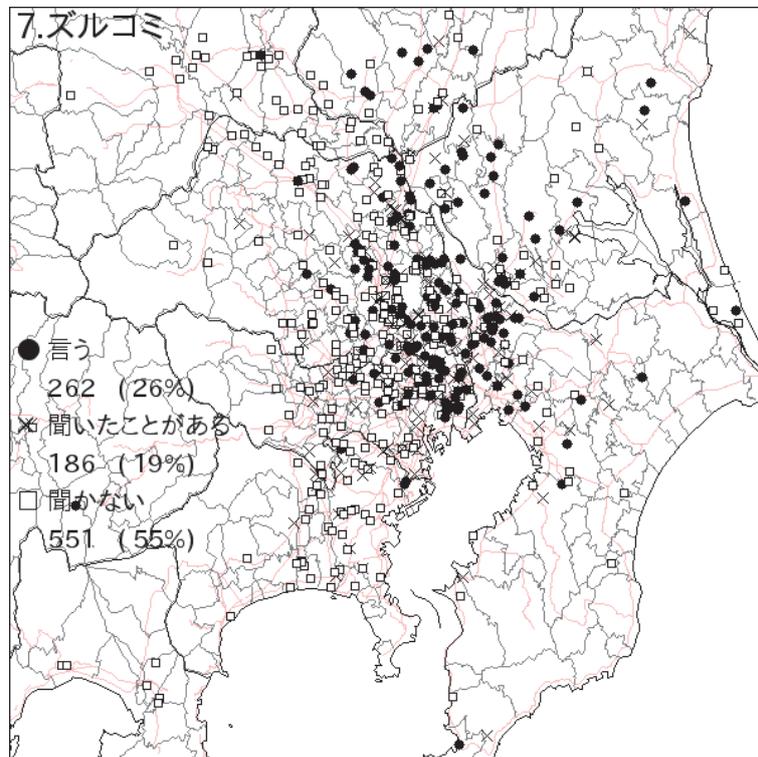


図8 ズルコミ (割り込み)

8. 3 再普及

分布が広がった語形の中には、一旦衰退しかかったものが、再度勢力を強めた例がある。

図9は、「片付ける」という意味の「カタス」の分布図である。ほぼ全域に「言う」が広がっている。

「カタス」は、1980年代の調査では、地域差について、首都圏北東部、つまり、23区東部から千葉県・埼玉県にかけて多く使用され、首都圏南西部、つまり、23区西部から多摩地域・神奈川県にかけては使用率が低いことが報告されている（河崎・井上 1983:203=図10, 荻野・井上 1984:385）。また、高年層に比べて若年層では使用が減少し、衰退傾向にあった（荻野・井上 1984:112-113, 東京都教育委員会 1986:266-267, 井上 1988:53）。

今回の調査では、30年前にうかがわれた衰退の方向はまったくうかがわれない。30年前の地域差の傾向を残してはいるものの、全域で使用が増加している。「カタス」は再普及したものと見られる。

⁵ 同時期の調査である井上・荻野（1984）では、特に中学生で、「ヨコハイリ」が近畿以北に広く分布する。

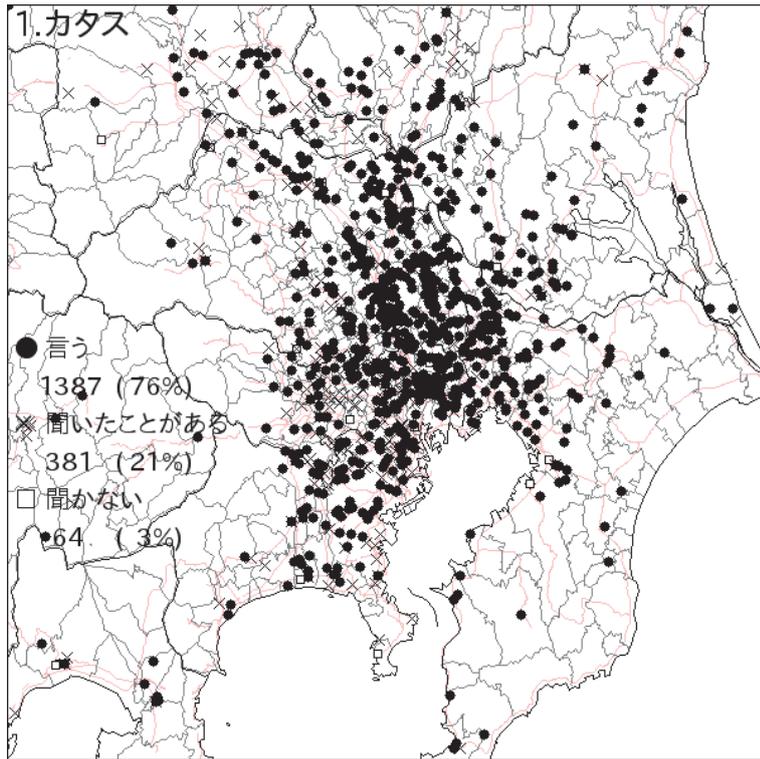


図9 カタス (片付ける)

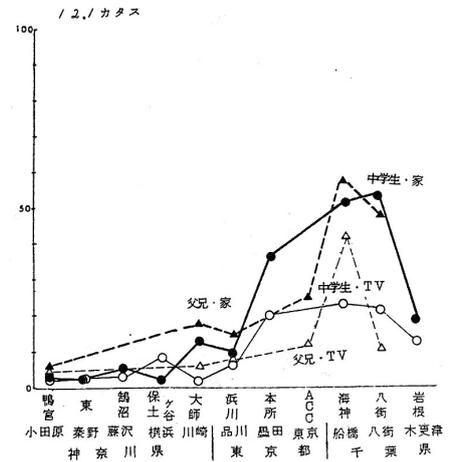


図10 カタス 1982 調査
(河崎・井上 1983)

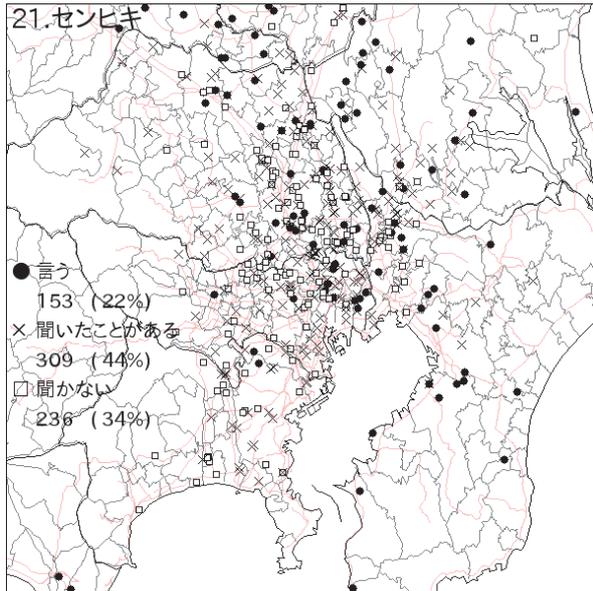
「カタス」の再普及は、1990 年代の千葉県松戸市の調査でその兆しが現れていた（早野 1996:61-66）。今回その傾向が、首都圏全域に広がっていることが確認された。再普及のきっかけについて早野は、「高年層の使用するカタス（松戸伝統方言）と若年層の使用するカタス（東京語）とは象徴的意味が異なる」と述べている（p.63）。このような語形に対する価値付けの変化のほか、例えば、首都圏若年層の人々の間にくだけた物言いへのニーズが広がった、といった、言語使用態度の変化についても併せて考える必要があるかもしれない。

9. 23 区内の言語境界線

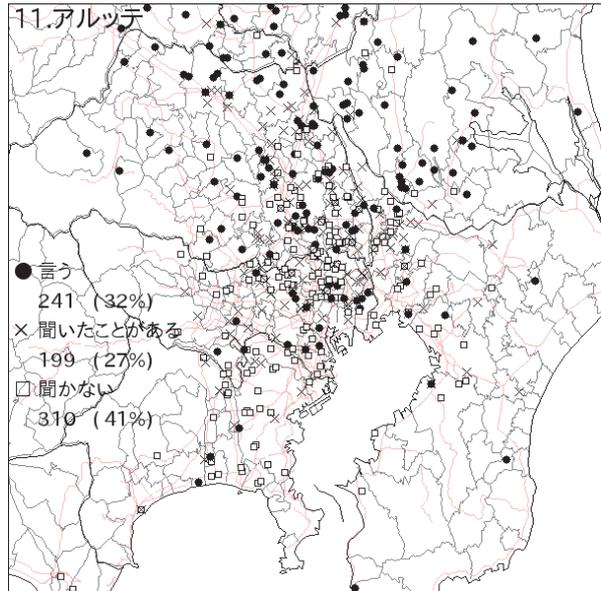
図3「バナナムシ」、図6「ヨコハイリ」、図8「ズルコミ」に現れているが、共時的に見ると、複数の分布図に共通して見られる境界に気づく。

「バナナムシ」「ヨコハイリ」「ズルコミ」はいずれも、東京 23 区中の北東部と南西部の間で分布に違いがある。この境界線の両側で使用語形が全く異なる、というような線ではなく、その違いは傾向的なものだが、他にも（以上の例に比べるとあまりはっきりしないが）、図11に示したように、「定規」の意味の「センヒキ」、 「歩いて」の意味の「アルッテ」、 「～したことがある」という経験の意味の「～タトキアル」など、このラインの北東部と南西部で、非標準形の使用傾向が異なる項目が見つかった。

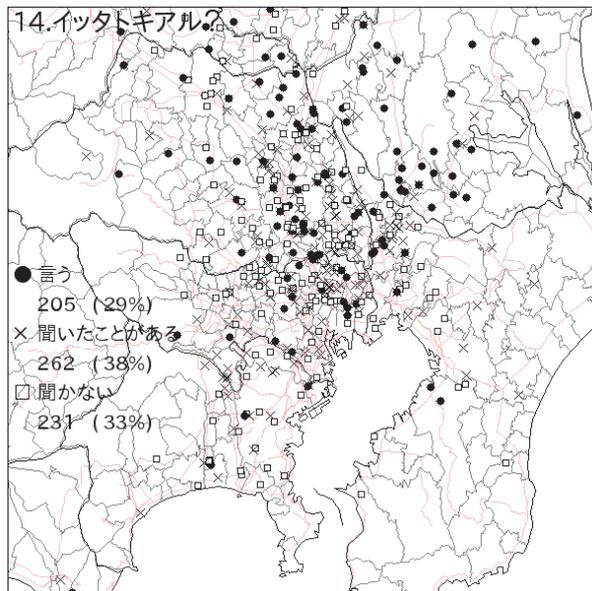
東京 23 区の北東部は広い意味での下町地域、南西部は広い意味での山の手地域とされること



①センヒキ (定規)



②アルツテ (歩いて)



③～タトキアル (したことがある)

図 11 東京 23 区北東部と南西部

がある⁶。この二つのエリアの間に言語的地域差があり、前者は埼玉県・千葉県にかけての地域と、後者は東京都多摩地域・神奈川県にかけての地域と連続性があるということがうかがわれる。

現代の社会的地域差としての下町地域と山の手地域の間での言語使用の違いについては、文京区根津(下町的地域)と文京区西片(山の手的地域)を調査した荻野(1983)、荻野・山敷(1983)、東京の東西8地点(氷川・青梅・八王子・国分寺・永福・市ヶ谷・根岸・東小岩)を調査した荻

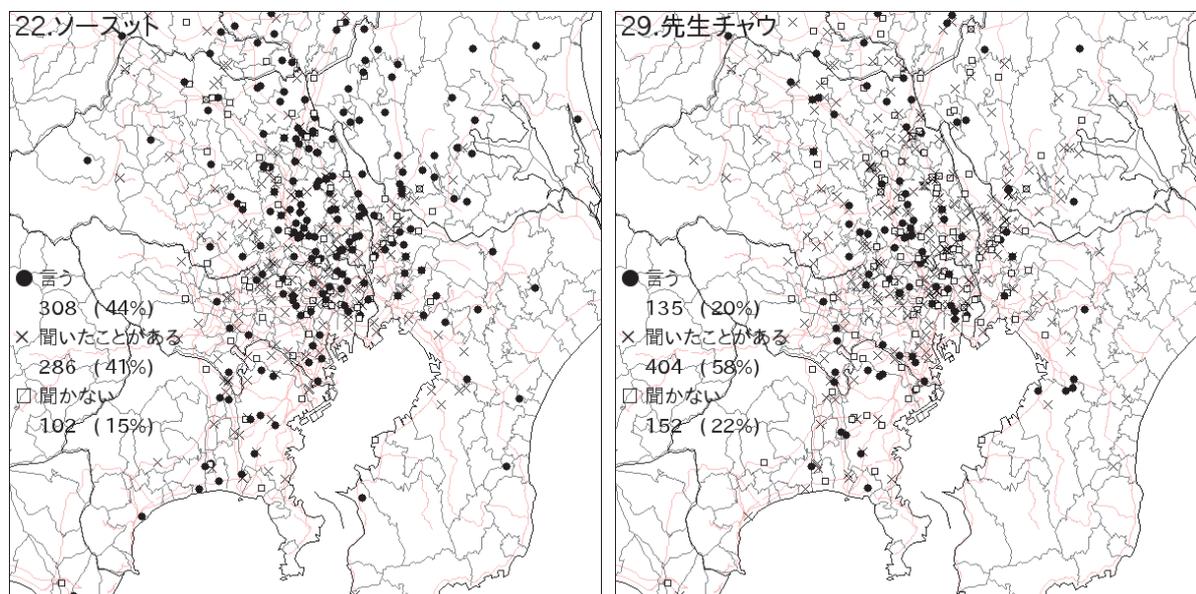
⁶ 「下町」「山の手」という地域区分の指標は明確ではないが、一般的には、学歴、所得、職業などによって判断される、住民の社会階層の構成が大きな手がかりになっていると考えられる。ただし、地域の社会的特性と言語使用との関係付けの理路を立てるためには、西澤(2004)が指摘するように、「統計上の階層分化はそれ自体社会の分極・分解傾向をただちに意味するものではない」(p.185) 点に留意し、慎重に考察を進めたい。

野・井上・田原（1985）に指摘がある。その傾向が現代若年層においても存在することを明らかにし、さらに、首都圏内の地域差を面的に把握したことは本調査研究の成果である。今後の精査により、より綿密な地域差を把握することも可能である。

また、先行研究はいずれも、下町地域では非標準形の使用率が高く、山の手地域では低い、（敬語使用はその逆）という傾向を指摘している。これに対して今回は、むしろ、山の手地域で使用率の高い非標準形（「バナナムシ」「ヨコハイリ」）の存在が明らかになった。今後は、同じ「非標準形」でも、語による語感や使用意識の面の違いを把握することが、地域差の背景を知るために有効であると考えられる（本報告書第2部鍮水論文参照）。

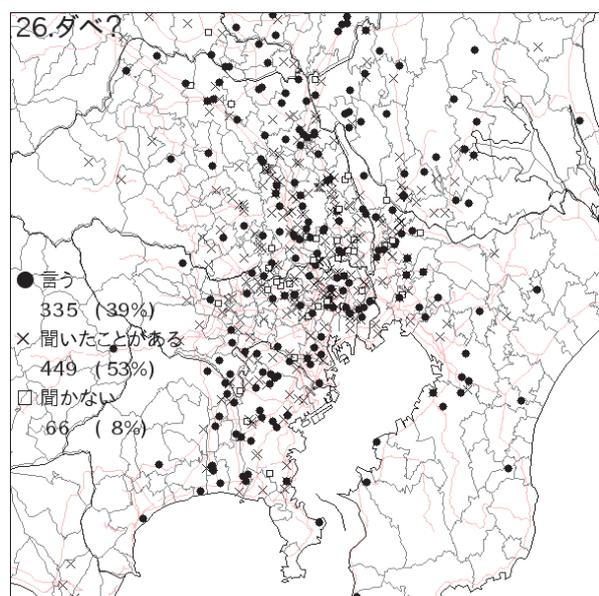
10. 非標準形の使用を避ける

地域最後に、いくつかの分布図から、東京都内の一部に、非標準形を受け入れにくい地域がある



① ソースット（そうすると）

② 先生チャウ（先生ではない）



③ ダベ?（でしょう?）

図12 非標準形を受け入れにくい地域

ことが予想される。

図7「カtas」の地図を見ると、首都圏全域で「言う」が多い中で、東京の23区西部から多摩地域東部に、「言う」という回答がまったく見られないエリアがある（×「聞いたことがある」と□「聞かない」が分布）。このエリアはまた、今回の調査で、接続表現の「ソースット」、関西方言由来の「～チャウ」という否定の表現、伝統方言の「べ」が再生し首都圏全域で若者語的に使われている「ダベ」という同意要求の表現等を「言う」という回答が、周辺部に比べて少ない地域でもある（図12）。当該エリアの調査地点数が充分でないため、現在のデータから確定的なことは言えないが、今後地点密度を高めて調査を行い、再検討したい。

首都圏の中に、非標準形を避ける地域がエリアとして存在するとすると、首都圏の言語と共通語・標準語との関係を考える上で注目される。今後精査したい。

以上、この調査で明らかになった、首都圏若年層の言語の地域差の傾向について報告した。

11. 非標準形から新しい共通語へ

最後に、首都圏若年層の使用する非標準形と、共通語との関係について述べる。

8.2で述べたように、列などへの「割り込み」を意味する「ヨコハイリ」という語は、この

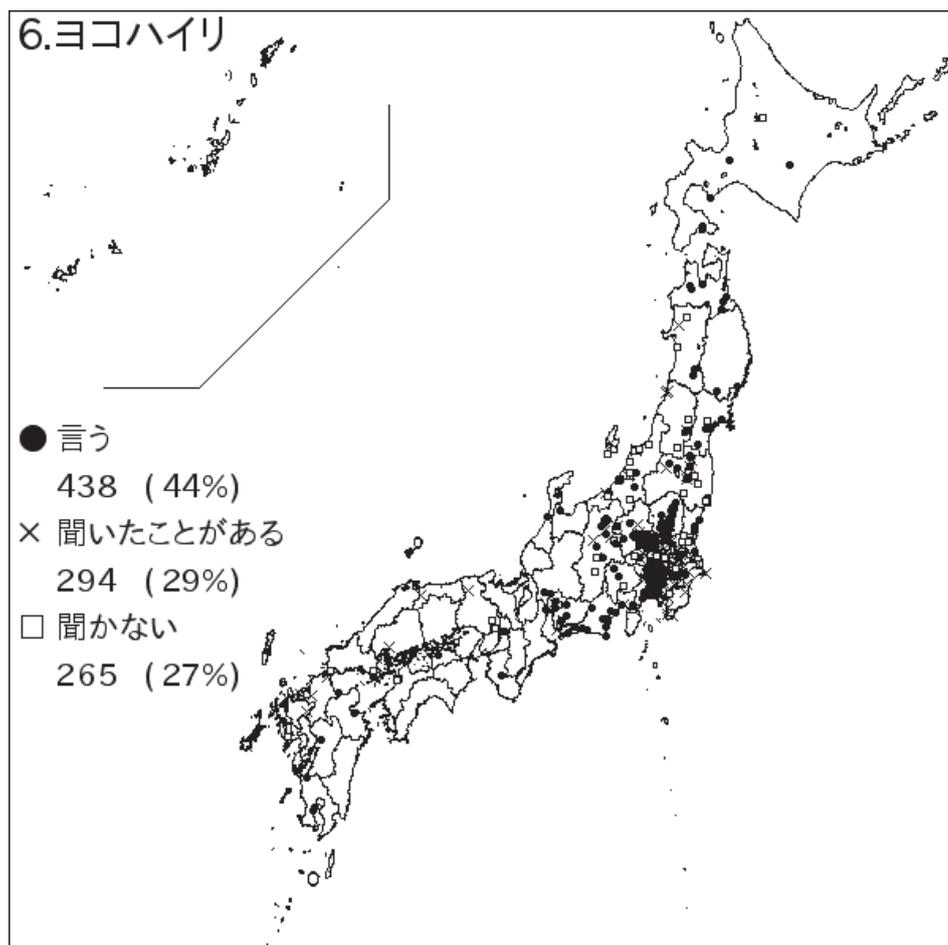


図13 ヨコハイリ（割り込み）全国

30年間で分布地域を拡大し、神奈川県から東京さらに首都圏外周部にまで広がった。図で示すと、図13のようになる。あくまでも、首都圏の大学に在籍する各地の出身者の回答である、ということに注意する必要があるが、北海道から沖縄まで、ほぼ全国に「言う」が広がっている。

また、書きことばでも、小説のような、言葉の選択に意を用いる文章に使用例を見出すことができるようになってきている。

- なにしる人間たちときたら、すぐに横入りをしたり、並ぶのを面倒がって人の腕をよこどりしたりする者ばかりなのだ。

(川上弘美『竜宮』文藝春秋2002、著者は1950生、東京出身、BCCWJより)

これらの事実から、「ヨコハイリ」は、使用地域の限定された首都圏の「方言」から、使用地域が限定されず、文体的にもインフォーマルに限定されない「共通語」へと、その性格を変えつつあることが推測される。

このように、首都圏若年層の使用する非標準形は、無意識に周辺地域および全国に発信され、「くだけた共通語」を含む新しい共通語として普及していく可能性がある。それが、周辺地域から流入したことばである場合もある。また、非標準形が共通語となる過程では、規範意識を初めとした様々な言語意識が関与していると考えられる。これらのことを含め、「首都圏のことば」と「現代日本語」との関係性を、具体例に則してつぶさに明らかにすることが、首都圏の言語を研究していく上での一つのテーマであると考えている。

文献

- 井上史雄（1983）『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究 —東京・首都圏・山形・北海道—』昭和57年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書。
- 井上史雄・荻野綱男（1984）『新しい日本語・資料図集』文部省科学研究費補助金「言語の標準化」資料集。
- 井上史雄（1985.2）『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』明治書院。
- 井上史雄（1985.3）『関東・東北方言の地理的・年齢的分布（SF グロットグラム）』東京外国語大学語学研究所。
- 井上史雄編（1988）『東京・神奈川言語地図』。
- 井上史雄（2011）『経済言語学論考』明治書院。
- NHK放送文化研究所（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会。
- 荻野綱男（1983）「山の手と下町における敬語使用のちがい」『言語研究』45-76。
- 荻野綱男・井上史雄・田原広史（1985）「周辺地域から東京中心部への《新方言》の流入について」『国語学』, 74-65。
- 荻野綱男・山敷陽子（1983）「東京における新方言」井上（1983）, 17-69。
- 加藤正信（1970）「変化する郊外のことば —東京の東側—」『言語生活』225, 64-72。

- 加藤正信・大橋純一・武田拓・半沢康（2004）『関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線
グロットグラム』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 河崎裕子・井上史雄（1983）「首都圏の《新方言》」井上（1983），183-208.
- 金田一春彦監修・秋永一枝編（2010）『新明解アクセント辞典 CD付き』三省堂.
- 倉沢進・浅川達人（2004）『新編東京圏の社会地図 1975-90』東京大学出版会.
- 国立国語研究所（1981）『大都市の言語生活 分析編』三省堂.
- 佐藤亮一他（1998）『東京周辺地域におけるアクセントの古態性に関する調査研究』科学研究費
補助金研究成果報告書.
- 柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料』文部省科学研究費特定研
究「言語の標準化」資料集.
- 田中章夫（1983）『東京語 —その成立と展開—』明治書院.
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.
- 東京都教育委員会（1986）『東京都言語地図』.
- 西澤晃彦（2004）「職業階層からみた東京圏」倉沢・浅川（2004），163-185
- 野村雅昭（1970）「現代東京語の展望」『言語生活』225，18-28.
- 早野慎吾（1996）『地域語の生態シリーズ関東篇 首都圏の言語生態』おうふう.
- 飛田良文（1993）『東京語成立史の研究』東京堂出版.